

2020年11月22日 礼拝説教要旨

詩編講解説教37「踏み出す勇氣」

詩編37：23～29、Ⅱテモテ1：7～10

「主は人の一步一步を定め、御旨にかなう道を備えてくださる。人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえていてくださる」(23、24節) 詩編の中でも特に慰めに満ちた言葉です。しかしこの詩人の置かれている状況は深刻です。この「倒れる」も「打ち捨てられる」も完全に打ちのめされてしまう状態です。放り出されて、捨てられる。ある訳では「砕かれる」という訳もあります。もう自分の力では立ち上がれない。こういう経験は人生の中でしばしば起こるのではないのでしょうか。愛する者の死や病気を経験して立ち直れなくなる。思いがけない試練、逆境に見舞われる。人間関係に悩む。今のコロナ禍もそうでしょう。仕事を失い、本当に放り出されるような経験をしている人がたくさんおられます。働きたくても仕事がない。学生たちにとっては厳しい時代です。何のために勉強してきたのか。何のために働くのか。社会は自分を必要としていないのではないかと考え一人悩む。それも倒れることであり、打ち捨てられる経験と言ってもよいでしょう。

もう一つ考えていただきたいことがあります。先週はコロナのニュースも気になりましたが、ずっと心に引っかかっている事件があります。東京で路上生活をしていた女性が殺されてしまった。バス停のベンチにいたその女性を近所に住む男性が殴って結果として死なせてしまったのです。その男性の供述を聞いてわたしはさらに心が痛み悲しくなりました。「痛い思いをさせればいなくなると思った」何て身勝手な動機でしょうか。彼女がその男性に何をしたわけでもない。ただそこにいるだけで、その存在を疎ましく思う。しかしこれは他人事ではないと思います。この男性の心理は、わたしたちが心の何処かに潜ませていることなのかもしれない。路上生活をしている人をどこかで軽蔑したり、目をそらしたりしている自分がある。そうやって無意識のうちにも社会の隅に追いやっているのではないか。それならこの犯人の男性と大して変わらないのではないか。

祈禱会でジュネーヴ教会信仰問答を読んでいます。つい先日読んだところは十戒の第八戒「殺してはならない」のところでした。それはただ殺人をしなければそれでいいということではなくて、カルヴァンは「内的殺人」と呼びますが、心に思うこと、例えば「妬み」「憎しみ」「怒り」「復讐心」そういうものも心の中で人を殺していることだと言います。ハイデルベルク信仰問答もそれを「隠れた殺人」と言います。そうやってわたしたちは心の中で誰かを殺している。そう考えますとわたしたちは単純に貧しく、打ち捨てられた者とは言えない。むしろ貧しい人、乏しい人を倒そうとしている側に立っている。それは他でもない主に逆らう人でもあるということです。

今日の箇所は非常に難しいところです。自分を正当化する時に、わたしたちは途端に聖書が読めなくなります。ブルグマンというアメリカの神学者は、詩編は人間であることの限界に追い込む言葉だと言います。皆さんはここを読んで追い込まれているのでしょうか。慰められたとか、いい言葉だとかで止まっていたはいけないのです。詩編第37編は全体を通じて「主に従う人」と「主に逆らう人」が対比されていますが、自分はどちらの側に立っているのか。主に従う人なのか、主に逆らう人なのか。権力者じゃないから、金持ちじゃないから、自分は主に従う人だ。そんな単純なことではない。誰でも権力者になりうる。自分の小さな人間関係の中

で、例えば夫婦でも、親子でも、職場の仲間同士でも、自分に力があると勘違いして相手を支配するようになります。弱い人を蔑むようになります。それは神さまに逆らう状態です。その一方で倒れこみ、打ち捨てられるような経験をする。虐げられ、抑圧される経験をするのです。だからどちらかではない。この状況は誰にでも当てはまることだと思う。強いて言えば、誰もが主に逆らう者である。神さまではなく、この世の富を愛し、権力におもねり、弱い者を虐げ、搾取する。そういう側にいる。そのようにして実は倒れている。打ち捨てられているのです。でもそのわたしたちの手を主はとらえていてくださる。そして主に従う者へ、御旨にかなう道へ、憐れんで貸し与える人生へ、悪を避け、善を行う人生へ、その生き方を転換させてくださる。そういう救いを神さまは行われるのです。

それがイエス・キリストの十字架とよみがえりの御業です。「人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえていてくださる」(24節) 感傷的になることはありません。実際にわたしたちは倒れているし打ち捨てられているのです。でもそこに主は御手を伸ばして、わたしたちをとらえてくださる。それがあの十字架です。キリストは十字架の上で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。キリストが打ち捨てられたのです。倒れこむわたしたちをとらえてくださるために主ご自身が十字架で打ち砕かれ、捨てられた。でもそれで終わりではありません。キリストは三日目によみがえられました。倒れこむわたしたちの手を取って引き上げてくださるのです。あの湖で溺れそうになったペトロの手を主がつかまえて引き上げられたことを思い起こします。その御手に支えられてこそわたしたちはどんなにつまずき倒れようとも、もう一度立ち上がり歩めるのです。

そしてここで重要なのは29節です。「主に従う人は地を継ぎ、いつまでも、そこに住み続ける」この第37編全体を通じて「地を継ぐ」という言葉が繰り返されます。地を継ぐというのは、旧約の民にとっては約束の地、神さまが与えられる嗣業の地カナンを思うことができます。でもわたしたちにとってこの地は神の国、イエス・キリストが十字架とよみがえりの御業によってもたらしてくださった永遠の御国ととらえることができます。洗礼を受けてキリストに結ばれた者たちは、この御国を継ぐ約束を与えられているのです。そのことを信じるときに、わたしたちはどんなに倒れていても立ち上がり、なお希望を持って歩み出すことができるのであります。今は明らかに悪い時代です。倒れこみ、自分一人では起き上がれない状態になります。そこから立ち上がり、歩み出すには勇気がいります。でも主がその手をとらえていてくださる。そしてわたしたちの目指すべき最終的な目標である神の国を約束してください。わたしたちは御国を継ぐことができるのです。勇気を出してその一步を踏み出していきましょう。